



**滝悦子 ●たき えつこ**  
1949年、長崎県生まれ。フリーライターとして、『dancyu』をはじめとする雑誌や新聞にエッセイやコラム、取材記事を執筆。テレビのリポーター、ラジオのパーソナリティで個性を発揮し、講演会も人気。(財)西日本文化協会評議員、福岡大学非常勤講師。著書に『博多発・味な男たち』『奔流の女』『鮎くう日々』『九州の美術散歩』『悦子と美沙子の男やろうもん。』などがある。ホームページは<http://www.takiesu.com/>

### 滝悦子さんのレギュラー出演中の番組

- KBCラジオ「だって博多の女(ヒト)やもん」(毎週火曜日18:25~18:30)  
博多の人の泣き笑いを、ほのぼのとお伝えするラジオ版投稿欄。
- KBCラジオ「滝悦子の福岡育ち!」(毎週土曜日17:40~45)  
俳優、歌手、作家、スポーツ選手など各界の人気者に聞く食物語。
- KBCラジオ「朝の色・いろ」(毎週日曜日8:15~30)  
酒蔵「亀の尾」の娘・伊豆美沙子氏との息の合ったコンビで人気沸騰。
- RKBラジオ「ふくおか博多の人だより」(毎週土曜日17:30~35)  
福岡で活躍中の各界の人と、電話やスタジオでトーク。



「講演のライブ感が性に合っている」と滝さん。滝さんならではの人間観察を生かした鋭い辛口トークが人気だ。

の仕事に依頼されるようになり、フリーライターとなった。そんな滝さんに、さらなる転機が訪れたのは長男を出産したばかりの35歳のとき。知り合いの放送局のテレビ局のディレクターから、「明日、食べ物番組を生放送してくれるレポーターを探しているんだけど、誰もいないから来て」と頼まれたのだ。夫を含め、周囲はシロウトの生放送出演を心配したが、滝さんは翌日、レポーターデビューしてしまふ。そして、そのまま週1回のレギュラー出演を続け、およそ10年間、その番組でレポーターを務めたのだった。

ラジオ出演も突然のことだった。ラジオの放送台本を書く仕事を引き受けた滝さんが、打ち合わせの席で、「アナウンサーの人に、ここはこういうふうにしちゃってほしい」と説明をしていると、スタッフから「アナウンサーが読むより、滝さんがしゃべったほうが早いはい!」と言われ、出演が決まってしまったのだ。これも35歳のときのこと。以後、ラジオのパーソナリティの仕事は23年間、58歳になつたいまも続いている。

「拾う」感があり、辛口のなかにも温かな人間味を感じさせる。40代半ばからは、講演の依頼も増えた。ほかにも、大学の非常勤講師として若者の育成にあたりたり、(財)西日本文化協会評議員や福岡県文化遺産委員として地域の文化振興にも尽力。食に詳しいのを見込まれ、飲食店のプロデュースなども手掛けた。

亡き父の教えと、病の母の存在が、働く原動力に



滝さんは言う。「私って、ものを頼まれる星の下に生まれているみたい」と。だが、頼む側からすれば、滝さんに、それに応えてくれるものを感じるからだ。だからこそ、ある人は就職を世話し、またある人は執筆を依頼し、そしてまたある人は放送番組の出演を頼んだのだ。

滝さんには、これまでの人生で大切にしてきた、亡き父の三つの教えがある。それは、一つ目が、「人と違うことをしなさい」。人と同じことをしても面白くない。二つ目が、「馬鹿と貧乏はつきりあうたらいかんよ、うつるけんね」。「馬鹿と貧乏」とは、どんな人のことなのか。滝さんは人生経験を重ねていくなかで、それは「自分の失敗やうまくいかないことを他人や世の中のせいにして、不平不満ばかり。マイナス思考で向上心もなく、そういう人には人望も人脈も金運もないから、つき合っても時

間の無駄だ」と悟ったそう。

そして三つ目は「顔の良か男とはつきあうたら、いかんよ」。「これは、顔のいい男性は小さいころからちやほやされているため、往々にして自分を鍛えておらず、中身がないという意味です」と滝さん。

父は早くに亡くなったが、示唆に富んだ言葉を残してくれた。また、母はずっと病弱だったが、滝さんが仕事を続けていく、なにより原動力となった。さらに大学に行けなかったコンプレックスは、本をたくさん読むなど自分磨きに転化させることができた。

滝さんの講演の抄録には、こんな言葉が残されている。「順風満帆では何も生まれぬ。仕事とは連続するトラブルを処理する作業であるからして、他人と比較せず自分の歩幅を大切に、自分を認め、自分をほめてやるのが幸福をつかむ秘訣だとも知った」

まだ50代でありながら、「たつたいま死んでも悔いはない」と言い切る滝さん。人生でやることはやりきってきた達成感に包まれている証しだ。